

2012年 7月20日

みらいの扉

高等特別支援学校 支援部 第40号



「見える」「きこえる」 「わかる」支援へ

あなたが異星に移住したとします。もともとその星で暮らしている人達がたくさんいます。そこでは、ありがたいことに地球での言葉が通じます。ですので、日常的な会話や動作にはさほど困りません。

しかし、なんとなく違和感があります。なにか、その星の人達は、自分には見えない電波というか、テレパシーというか、そんな得体の知れないモノから情報を得て、日常生活を成り立たせているようです。あなたにはそのモノの正体も分からないし、どうすれば他の人達のように情報を得ることができるのかも分かりません。しかし、その星で暮らすには必要不可欠なモノのように思います。

あなたには、あなたの価値観があります。それに基づいて考え、感じ、行動します。しかし、どうもその星では受け入れてもらえないことも多いようで、なぜか拒否されたり相手を怒らせてしまったりします。でも、どうすればよいのかさっぱり分かりません。自分の何が周囲と食い違っているのか、分からないのです。

もう地球には戻れないので、その星で暮らしていかなければならないし、暮らしていきたいと思っています。でも、うまい「やりかた」がなかなか分からないのです。



こんなとき、「通訳」がいてくれたらありがたいと思いませんか？

「地球生まれのあなたはそう思うよね。実はね、この星では目に見えない情報が飛び交っていて、みんなにはそれが分かるの。あなたには分かりにくいだろから、教えてあげる。実は○△□という情報が、今そこにあるの。だから、みんなこういう風に考えてるの。こういうときには、こうすればいいのよ、この星では。」

そう説明してくれる人が、そしてあなたの気持ちを皆に説明してくれる人が、たったひとりでもいたなら、あなたはどれだけ安心し、不可解さが軽減され、生きることになんか前向きになれるでしょうか。



先日我が子（5歳）が中耳炎になり、ほとんど耳が聞こえない状態となりました。背中を向けている子どもにいくら声をかけても振り向きません。向かい合って話をしても、こちらの話がよく解らないまま、自信なさげに作り笑いをうかべて「うん」とか「はい」とか調子を合わせて返事をしようとする始末。でも、身ぶり手ぶり、時には実物や絵などを提示しゆっくりはっきり声をかけると、きちんと子どもの「意志」のある返事が返ってきます。そういうとき、子どもの表情は明るく自信に満ちています。

このとき、学校にたくさんいる「聞いて理解することが難しい子ども達」を思い浮かべました。相手の話が理解できないって、辛いし不安だしいろんな事に自信が持てなくなるんだろうな…と。



P T A研修会「障がいをもつ子の思春期支援」でも、「冷静に通訳・解説を」という話をさせていただきました。冒頭のような例えが適切であるかそうでないか、いろいろとご意見もおありかとは思いますが、私は特性の強いこどもたちを見ながら「異星」に思いを馳せることが多々あります。

他の人に見えたり聞こえたりしている（分かっている）ことが自分には見えないし聞こえない（分からない）…そこから来る食い違いやすれ違いが原因となるトラブルは、やはり少なくありません。しかし、「実はね」と、本人に見えていないことや聞こえていないことを絵や文字にして紙に書いて見せると、納得して腑に落ちるということもまた、少なくありません。

それは、「他人の気持ち」であったり「時間的な見通し」であったり「過去の積み重ね」であったり「その場の雰囲気」であったり「自分の客観的な姿」であったり、いろいろですが、いずれもとても「見えにくい」「聞こえにくい」ものですね。



もちろん特性は一生持ち続けます。通訳してもらって「なるほど！」と納得したからといって途端に自力で「見えないモノを読み取る」ことができるようになるわけではないでしょう。しかし、「どうやら見えないモノが存在するようだ」と学習することは可能ですし、通訳者を頼りに混乱を避ける術を身につける子どもは多いと思います。また、経験を重ねて「自力で読み取る術」を身につける人もいます。

目の前で混乱し迷っている人の「文化」を理解し、尊重すること。そして更に、現代日本社会の文化との橋渡しをすること。あせらず、忍耐強く、でも将来的に自分で自分を支援しながら社会自立してくれることも願いながら…それが「支援者」として求められていることのひとつではないかと思っています。

（支援部 聳城）